

「ありがたみ」の躰け方

三倉茉莉奈 女優・タレント・歌手

大阪市内で生まれ育ち、難波や阿倍野、街に出るとネオンがいっぱい。でも私が好きなのは、ずっと変わらず同じ場所にある通天閣の灯り、そして何より実家の灯り。

五歳で劇団に入り、一〇歳で双子の妹・佳奈と「ふたりっ子」に出演、芸能活動を始めたが、最初に監督さんから言われたのが、「ドラマが放映されたら二人はすごく人気者になるかもしれないけど、学校だけはちゃんと行きや」。勘違いして天狗になって学校に行かなくなる子供が多いなか、マナカナにはそうなってほしくない。母も「芸能活動はいつやめてもいい」というスタンスだったので、私たちは学業優先。小中高と、遠足や運動会、テストも一度も休まず、ごく普通の学校生活を送った。

仕事をしていた母は帰宅が遅いときもあった。だから学校からの帰り道、家の窓に灯りが見えると、「あ、お母さん帰ってる」と嬉しかった。家族の時間を大切にすることで、テレビはリビングに一台だけ。それぞれがバラバラに過ごすのではなく、みんなリビングに集まって一緒にテレビを見て一緒にご飯を食べる。

子供部屋も高校まで佳奈と一緒にの部屋。互いに負けず嫌いだ。だから、テスト勉強の時、どちらかが「ちょっと眠るから三〇分経ったら起こして」と言っても起こさない。小さいデスクライトを点けて、相手が眠っている間に自分だけこっそり勉強する。でもそんな切磋琢磨のおかげで二人とも希望の高校・大学に進学できた。

大学時代は門限の厳しさに駅から走ってばかりいた。いまだき大

でんき * STORY

学生で二時だなんて！先に帰宅している佳奈の部屋の灯りがやけに眩しかった。門限は二〇歳でようやく二四時になり、東京で独り暮らしの今は当然ないけど、迎えてくれる灯りもない。

流れゆく日々の生活のなかで、自分の気持ちもゆらゆら揺れる。そんなとき遠くに見慣れた灯りが見えるとホッとする。通天閣や実家の灯り。それは自分の居場所を確認できる目印だ。

電気がないと街も家も暗い——ギリギリ昭和生まれの私は、不便を少しは知っている。生まれたときから電化製品に囲まれていたが、ケータイはなかったし、みんなが持っていた高校時代でさえ、母に持つことを禁じられていた。佳奈と一緒に帰ろうと学校中を探し回ったりしたから、持つようになった今はすごくありがたい。何でもあって当たり前前の環境で育つと、あることのありがたみは感じない。それは少しかわいそう。電気も自然にあるわけじゃない。つくって送ってくれる人がいるからこそなのに、そこに思いが至らない。

大阪の実家には時々帰るけど、今も母は働いているので窓に灯りが見えないこともあるし、テレビは相変わらず一台しかない。でも私もいつか結婚して子供が生まれたら、きっと母と同じようにするだろう。佳奈の子供の誕生を控え、そんな思いが強まった。



みくら まな
女優・タレント・歌手
1986年大阪府出身。関西学院大学社会学部卒。一卵性双生児の妹・佳奈と96年NHK「ふたりっ子」でデビューし、「マナカナ」の愛称でブレイク。2008年NHK「だんだん」でヒロインを務めた。テレビ朝日「SP〜警視庁警護課」、東海/フジ「赤い糸の女」、TBS「隠蔽捜査」など。
<http://ameblo.jp/mana-mikura/>
<http://www.manakana.jp/>



©Daniel Y. Go